

戦前団地を中心に ドイツ・オランダを巡って(オランダ編)

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究』

MAY 2012
VOL.033

オランダでは、19世紀半ば頃から産業革命が始まり、都市への人口集中が始まった。それに対応して都市部では土地投機により小さな中庭を持つ劣悪な居住環境の閉鎖型住棟が蔓延した。その状況に対し、1902年の住宅法は、住宅の物理的品質の確保の義務付けと住宅開発に対する国の資金助成の制度創設、同時に人口1万人以上の都市に対して都市拡張計画の策定を義務付け、これにより住宅危機は大きく緩和された。

アムステルダム

アムステルダム市の20世紀初頭の拡張計画は、北部、西部、南部、東部の各方面に対して策定された(Fig.1)参照。

その中で、特に南部拡張計画は



Fig.1 アムステルダム拡張計画案 1915¹⁾
A: 北部 B: 西部 C: 南部 D: 東部(ヴァーターフラーフスメーア) E スパールンダマー
H.P. ベルラーヘが担当し、中層集合住宅を中心に街区が形成された。また、東部ではヴァーターフラーフスメーアの干拓地に独立性の高いヴァーターフラーフスメーア田園村落が計画されたが、アムステルダムとの合併を機に独立性は薄められ、一部ベントルプ等の団地だけが実現された。

スパールンダマー地区は19世紀末に向けて建設された港で働く人々向けに開発された。1902年の住宅法の要求に従い、街路が計画された。

○デ・ファルケンクラベール:

これは1棟の集合住宅だが、南部

拡張計画にとっては要となるフィクトリー広場にあり、南部拡張計画のメルクマールでもある。1927~31年に建設されたオランダ初の12階建てで、当時は「摩天楼」と呼ばれていた。設計者はJ.F. スタールである。

摩天楼ゆえにアメリカ的で、当時の新聞に「ヨーロッパで最も高い塔状住宅」、「高さだけでなく、その全体デザインが本当にアメリカ的な外観」とも書かれた。しかし、1フロア当たり2戸の住戸は120㎡余りの広さで、エレベーター、ダストシュート、セントラルヒーティングや給湯、電気ベル等、当時最先端の設備を備え、労働者の住宅とは無縁のものであった。しかし、これも比較的中小規模の住戸から成る地域の中で、階層ミックスを行う一つの有効な手段でもあったとも考えられる。

○デ・ダヘラート:

ベルラーヘによる南部拡張計画地区内の当団地は、デ・クレルク及びピエ

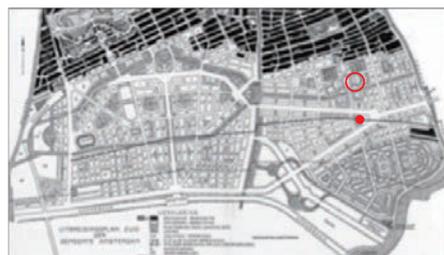


Fig.2 南部拡張計画の中のデ・ヴォルケンクラベール(赤丸)とデ・ダヘラート(赤円)²⁾



Fig.3 デ・ヴォルケンクラベール³⁾

ト・クレマーの設計で1923年に完成し、「労働者の宮殿」とも呼ばれた。

運河に対して鉛直な中心道路の運河に面する正面左右にあるリセ(高校=団地外)と一体化されている。またその中心軸の奥には、それを受ける小広場(団地外)から道が左右に分かれ、その広場に面して住棟遇部に特殊な壁面を持ち、また、高さ(スカイライン)も他とは異なる棟が配置され、遇部であることが強調されている。それは必然的に高校からこの遇部までを一領域として意識させる。また住棟は2戸毎に分節化され、スケール感を低減させている。

中心道路の裏の、屋根が小さく分節化された住棟前面には、他街区との間にコモングリーン(Fig.5)がある。同コモンとの関係において、適切なスケールの領域性が確保され、領域に対する帰属意識が醸成され易い。この棟と中心道路に面する棟との間は両棟の住戸の専用庭及び共用庭で囲われた領域となっている。

○エイヘンハルト:

これはスパールンダマー地区にあるスパールンダマープラントスーン公園を挟み相対する2棟の住棟(1・2

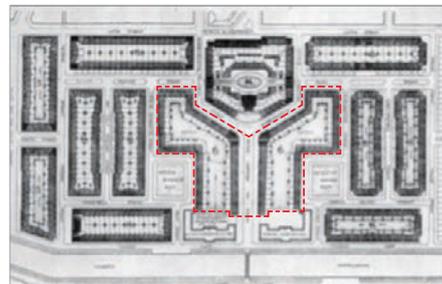


Fig.4 デ・ダヘラート配置図⁴⁾(赤枠内)



Fig.5 隣接街区との間のコモン⁵⁾

期)と、その公園に先端が接する三角の変形街区を形成する中庭囲み型の住棟(3期)で構成され、ミケル・デ・クレルクの設計で1913～1920年にエイヘンハルト住宅協会により建設された。

中でも三角形の敷地に建つ住棟はその形状からヘット・シップ(船)と呼ばれ、棟内に郵便局(現在はヘット・シップ・ミュージアム)と幼稚園というコミュニティー施設を抱え込んでいる。先端の郵便局部分が地区の公園に面する。高さは周辺街区と同じ4～5階建てだが、三角形の頂点部分と、底辺である部分は2階建てになっている。底辺部分は、他の街区の中庭から出てくる動線を受ける形状の小広場を持ち、他の街区との連携がとれている。本街区の中庭側は幼稚園の園庭と1階住戸の専用庭およびコモングリーンとなっており、集会所が設けられている。

○リンネウスホフ：

ヴァーターフラーフスメアの干拓地内に1920年代に出来た団地の一つである。

同干拓地内に設けられていたローマカトリック教会の飛び地に1924～28年にかけて建設された中庭囲み型の小規模団地であり、従って中庭に団地の規模には不釣り合いに大きな教会が配置されている。この教

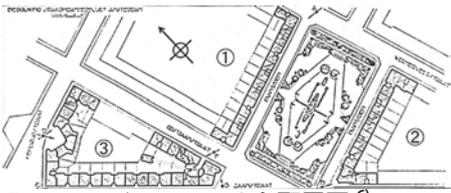


Fig.6 エイヘンハルト配置図 6)



Fig.7 ヘット・シップ鳥瞰図 7)



Fig.8 ヘット・シップ外観 8)

会が周囲の住棟の軸線に対して45度傾けて配置されていることにより、教会の周囲には領域性が明確に看取できる三角形のオープンスペースができています。

加えて、教会と並んで中庭にはテニスコート、そして西側入り口の脇には学校が配置されており、街区内にコミュニティー施設を抱え込んでいる形になっている。住棟は若干の前庭と裏庭を持っているが、裏庭の様子は確認できていない。テニスコートでは住民がテニスに汗を流しており、単にオープンスペースがあるというだけでなく、「祈り」「スポーツ」「学び」といった様なコミュニティーに重要な活動が誰の目にも見える様になっており、帰属意識を醸成するのに役立っている。中庭は適切な規模である。設計はA.J. クルプホラーとA.J.J.F. スタールであった。

○ベトンドルプ：

ヴァーターフラーフスメア田園村落の一部として実現した団地である。アムステルダムで初めてのコンクリート住宅団地で、1923～25年に建設された。もちろん煉瓦の住宅も建設されている。配置計画がすばらしい。視線が一直線に通る様ところが余りなく、概ねアイストップがある。コーナー部は屋根の高さに変化を持たせたり、壁面を出したりして、アイストップまでの間の領域性を明確にしている。住棟は前庭と

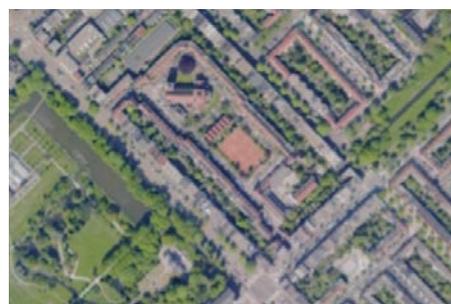


Fig.9 リンネウスホフ航空写真 9)



Fig.10 リンネウスホフの教会と住宅棟 10)

裏庭を持ち、それらの庭を競ってガーデニングしている。住棟に囲まれた中庭には、自転車等を入れる物置が増築され、高齢者用のシニアバギーの車庫にしている人もいます。一定の奥行き専用庭以外の部分はコモングリーンになっている。このコモンの規模が適正で、かつ、裏庭が面していることもあり、そこに対する帰属意識もある。即ち、道路側と裏庭側の両面で帰属意識が醸成されていることになる。住民は、誰がどの様な庭造りをしているかを良く知っている模様で、案内してくれた老人はそれが自慢で、いろいろな人の庭を案内してくれた。自分の住む団地に誇りを持ち、自慢できることは正に帰属意識の発露である。

ロツテルダム

ロツテルダムは13世紀の集落が16世紀に港が出来て港湾都市として発達し19世紀半ば以降には北海に出る新水路が掘削されて大型船が直接港に入ってくる様になり、経済が大発展した。その市街地は、元々は主としてマース川の北側に展開されていた。19世紀半ば以降の経済発展・人口増加に伴い、20世紀に入り1902年の住宅法に従って、同市においても都市の拡張計画が作成された。拡張は主として北西部=NW(ノルド、ブレイドルプ)、西部=W(ニーヴェ・ヴェステン、スパンヘン)、南部=S



Fig.11 ベトンドルプ配置図 11)



Fig.12 ベトンドルプの街並み 12)

(ブルームホフ、タルヴェビュールト)等において行われ、市街地化された。

当時は、フレエヴェイク田園村落が建設された地区はまだ南部市街地拡張区域の外の田園地帯であった。

北部ではブレイドルプの地区において Fig.14 に見る様な拡張計画も策定された。これはフルーセン公園を中心として、5階建て程度の中庭囲み型市街地住宅で覆われる予定のもので、同公園から東は現在でも概ねこの計画案に近い状態で市街地が形成されている。

○スパンヘン (プリंकマン街区) :

西部拡張地域のスパンヘンにおけるミシェル・プリंकマンの設計で1919～22年に建設された中庭囲み型団地である。全戸が中庭側からアプローチする。視察時は全面的に復元工事中だった。街路側住棟から突出した枝棟により囲われた空間が、4層という高さから中庭の密度感を高め、都会性を持った中に極めて親密な感覚の空間を形成している。黄色煉瓦が明るく、陰鬱さを感じさせない。街路側には住戸の出入り口が無いので、街路側への参加度が低いのではないかと考えていたが、街路に面する開口が割合に大きく、街路側に対する参加度は適度にある。中庭側は全ての住戸の入り口が向いており、動線も含め住民のアクティビティが必ず出る場であり、いやが

うえにも帰属意識が醸成される。3階の空中街路もコミュニティーの場になっていた。

○フレエヴェイク田園村落 :

1914～42年にかけてロッテルダム郊外 (Fig.13 参照) に建設されたテラスハウスを主体とした住宅地であり、基本計画はベルラーへが行っている。

テラスハウスが主体だが、多様な住棟タイプが供給されている (というよりは、後に上層階に増築が行われたように見える)。住戸は小さい前庭と裏庭を持ち、街路側は街路幅と前庭の幅と住棟の高さにより、適度なスケール感を与えられている。住棟に囲まれた中庭側は、住棟に付属する専用庭とそれをつなぐ小径で構成されている場合と、加えてコモングリーンがある場合がある。専用庭には物置や作庭用の小屋が増築され、庭造りとあいまって住民の個性が出ている。しかし、同じように平坦なベトンドルプは、道路の行き止まりや屈曲を利用し、外部空間における領域性を看取できるのに対し、街路

が短く屈曲している部分が無いわけではないが、総じて直線的に過ぎるところが残念である。

○キーフウーク :

モダニズムの旗手であった J.J.P. オウトの代表作の一つで、元の建物が老朽化していたために、近年ほぼ元通りに再建されたものである。デザインは秀逸で、現代でも十分に通用するものだが、街としてはRの付いたコーナーウィンドウのある部分 (Fig.20 参照) 以外は、均質に過ぎる。住民の個性を街路に向かって演出できる場合は、通りに面する開口部以外に無い。周辺街区との関係で、思いがけなく残された不整形の外部空間が、住民のアクティビティを誘発する可能性がありそうだ。住民たちの井戸端会議は交差点で行われていたが、もう少しコーナーであることを意識し溜まりをつくる等の処理も可能であったはずである。

ところで、再建された建物なので時の年輪を感じることはできない。そればかりか、モダニズムの陰影の少ない均質な建物は、住民の個性を



Fig.13 ロッテルダムの拡張計画 1903 年¹³⁾

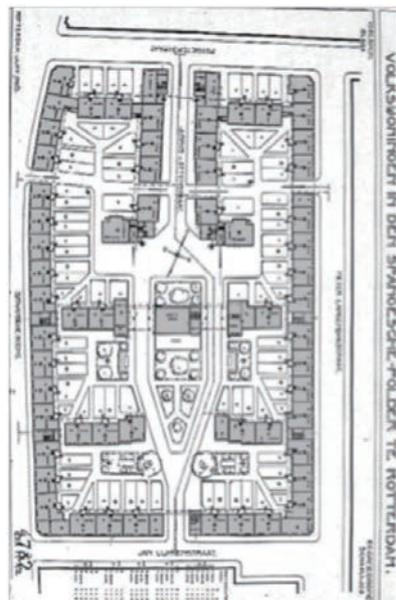


Fig.15 スパンヘン1階平面図¹⁵⁾



Fig.17 フレエヴェイク田園村落配置図¹⁷⁾



Fig.14 ブレイドルプの拡張計画 1929年
クルムホルト/ヴィッテフェーンによる案¹⁴⁾



Fig.16 スパンヘン中庭と3階共用通路¹⁶⁾



Fig.18 フレエヴェイクの水路沿いの景観¹⁸⁾

演出する空間が無いと、街として活き活きとした生活感が乏しい。

○フルーセンラン集合住宅：

北西部拡張計画の一部ブレイドルプ地区に建設された開放型街区の住棟である。1931年に建設され、設計者はファン・デン・ブローク。周囲街区が全て中庭閉鎖型で構成されている中で、閉鎖型街区の中庭に面する部分の居住環境（採光・通風等）改善のために、フルーセン公園に面する矩形街区の一边を開放し、開放型街区～団地の並行配置に至る先鞭をつけたと言われている。（もっとも、ドイツでは既にフランクフルトのヴェストハウゼンやベルリンのブリッツ等では閉鎖型街区によらない街区構成が行われていた）。

本集合住宅は3棟がコの字型に配置され、コの字の縦棒に相当する部分が大通りに面する。その1階コーナー部には店舗が入り、街に対して有用な機能を提供している。同棟から公園に向かって伸びる棟は半地下を持ち、その半分が倉庫、残り半分の中庭に面する部分は雨天時の子供

の遊び場になっている。

中庭が公園に向かい解放されていることにより、外からも中庭が見え、その解放感が良く分かる。各住戸のバルコニーは中庭側と公園側に設けられており、中庭と住戸との関係、およびそこからの公園の眺めが重要視されていたことが理解できる。

○住宅街区の構成の変遷：

都心部の住宅で構成された欧米の街区は、ドイツやオランダを問わず一般的に産業革命以降の都市に集中する人口の受け皿として建設された中庭囲み型の複数の住棟で構成されていた。その居住環境の劣悪さが、伝染病の温床になったことが明確になり、公衆衛生概念の確立と共に、都市における街区形成に関する考察が盛んになり、各住戸への日照・通風の確保等に関する対処方策を生むことになった。その一つが、街区構成の改革であり、中庭の閉鎖状況を開放することや、並列型の住棟配置へと繋がっていった。Fig.23では街区が、Ⅰの小規模な中庭を囲んだ住棟の寄せ集めの段階から、Ⅱの大きな中庭を囲む単純な形態の住棟で街区を構成する段階（フルーセンランの他街区）になり、やがてその短辺が解放されたⅢになり（例えばブリッツ団地）、均等な並行配置（例えばヴェストハウゼン）に至った、街区構成概念の変遷を示す。



Fig.22 半地下の子供の雨天時の遊び場²²⁾

出典

- 1) http://www.efl-stichting.nl/pub_vaneesteren_2_3.php
- 2) http://www.efl-stichting.nl/pub_vaneesteren_1_6.php
- 3)5)8)10)12)16)18)20)21)22) 撮影：大坪明
- 4) <http://www.tipamsterdam.nl/video/de-dageraad/>
- 6) http://www.housingprototypes.org/project?File_No=NETH002
- 7) 現地看板（撮影：大坪明）
- 9) Google Earth
- 11) 現地看板（撮影：大坪明）
- 13) Rotterdam het uitbreidingsplan van G.J.De Jongh 1903, Hostrosche Vereniging Prins Aleander, http://www.unitedarchitects.com/public/documenten/UA010_alexanderpolder.pdf
- 14) Maurice Dumas_Uitbreidingsplan Blijdorp (Witteveen), <http://www.mauricedumas.nl/stedenbouw/uitbreidingsplan-blijdorp-witteveen/>
- 15) Ken Lanbla, "Abstraction and Theory: Social Housing in Rotterdam, the Netherlands", <http://corbu2.caed.kent.edu/architronic/v8n1/v8n104.pdf>
- 17) "Kuipel Compagnons Tuindorp Vreewijk", http://www.kuiper.nl/?section=Projects&id=45&lan=_nl
- 19) Art, Architecture and Engineering Library, Lantern slide collection <http://quod.lib.umich.edu/u/ummu2ic/x-1s017087/1s017087>
- 23) RWTH extern, Am Anfang war die Stadt http://www.academia.edu/12167635/Am-Anfang_war_die_Stadt_At_the_beginning_there_was_the_city



Fig.19 キーフウーク空撮¹⁹⁾



Fig.20 キーフウークの街並み²⁰⁾



Fig.21 フルーセンラン集合住宅の中庭²¹⁾

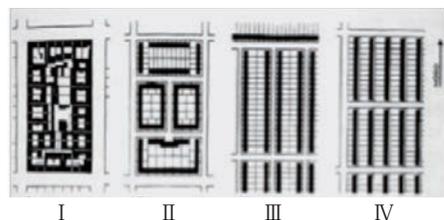


Fig.23 街区構成の変遷²³⁾

『戦前団地を中心にドイツ・オランダを巡って（オランダ編）』

発行：2012年5月

レクチャー：大坪 明（武庫川女子大学 教授）

執筆：大坪 明（ " " ）

（講演：2012年4月27日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111（内線：6720）

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>